

伝統的な行事と時代の流れ

副園長 高田和宜

節分の豆まきの前の週に、保育支援アプリの営業の方が九州と四国から来られました。玄関に入られたとき「なにか懐かしいにおいがありますね。」と二人とも言われました。ちょうどその日の午前中に火鉢で豆まき用の大豆を煎って、子どもたちに見せ、節分についての話をした日でした。自分が「煎った豆を前は子どもたちにその場で食べさせていたのですが、今は食べさせないように国から指導が入っているので『匂うだけだよ。』と煎りたての温かい大豆を子どもの掌に載せて匂わせるだけです。」とお話ししました。営業の方が「食べることも規制が増えましたよね。」と話され、ミニトマトを食べさせる場合は4分の1に切るように、サクランボは種を出して4分の1に切って提供するようになってきていること、園の行事で餅つきやお月見で作ったものは食べさせることを避けることなども国から通達があったことが話題になりました。

山口大学教育学部附属幼稚園では、コロナ前は子どもがお月見団子を丸めたり餅つきでは男性保護者と園児がついたものを丸めたりして、みんなで一緒に食べていたこともお話ししました。

コロナ後に再開する方向で考えていましたが、今度は衛生面だけでなく、誤飲・窒息を避けるために園の行事で食べさせることができなくなったことを話すと、四国から営業に来られた方が「この園の節分は鬼がまだ来ますか？」と聞かれました。「附属学校なので附属小・中学校から主体的に鬼が来てくれます」と答えました。すると驚くことに四国の公立の幼稚園・保育園では「幼児虐待につながる」ということで鬼が来ないところが増えていくと教えていただきました。このことは職員のミーティングで話題にして、節分への配慮事項を共有しました。

節分の日、「鬼が来るから行かない」という園児は以前からいました。園では鬼に子どもたちの自分の中にある心の鬼を追い出してもらって、きれいな心になって福の神に来てもらうという設定で話をして節分の行事に向かっています。火鉢を囲んで豆を煎りながら心の中にどんな鬼がいるか（乱暴鬼、片づけない鬼、泣き虫鬼、怒りんぼ鬼など）尋ねながら、自分の心と向き合う時間をもつようにしています。鬼が来たら豆をまいて心の中の鬼も連れて帰ってもらう設定で進めています。鬼が「降参だ！」と帰っていくと、すかさず着物姿の福の神がよい子になった子どもたちに花吹雪をまきながらと春を連れてくるのが本園の一連の流れです。

今年は年少組年中組には鬼はテラスには上がってこないことが伝えてありました。花組では前日のお帰りの集まりの際、鬼がテラスに上がってこられない呪文がかけられました。それでも年少児はドキドキのようでした。

節分当日、登場する鬼には事前に四国の節分行事の状況をお話しし、必要以上に恐れさせないことを共有してスタートしました。赤鬼のお面（顔の一部）からは視界が狭いため副園長が後ろから誘導することになりました。青鬼は視界良好と若さで勢いよく風組・星組の前に登場し、派手に豆をぶつけられていました。赤鬼は視界不良と「必要以上に怖がらせないように」との付度が過ぎて、優しい声の「悪い鬼はいませんか？」状態だったので後方から誘導していた副園長が赤鬼の後ろに隠れて副音声で「悪い鬼はどこにおるか！」と大声で叫ぶと赤鬼も少しずつ覚醒して調子を上げ、そのまま青鬼と附属小学校にも乱入し、もみくちゃにされていました。

その後鬼と福の神と振り返りをしましたが、子どもたちの素直なまなざしと行動に癒されたようでした。7～9年後に赤鬼が所属する中学校の生徒の姿になることを考えると一貫した育ちを目指すことの大事さもほっこりと共有されました。

節分の片づけをしていると「副園長先生が赤鬼を動かしていたんよね。」と年少児に確認されました。幼児期にファンタジーと現実が入り混じった世界を楽しんで過ごせることも心の豊かさにつながることでしょう。